芸振

大分県芸術文化振興会議会報
県立美術博物館建設促進特集号
No.9　46.12

発行所・大分市大手町　県教育庁文化室内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　　編集人・田村卓夫

芸術の価値

上田　保

昭和17・8年の頃であった。戦争がいよいよ熾烈となって鉄・銅・真鍮といった金属類は余すところなく徴発、回収され、遂に民間では箪笥の抽出の引手や蚊帳の吊手まで献納すると云うときに、彫塑家が呑気に大事な銅で裸体像など制作しておるのは全く以って怪しからんと、ひどく軍部の忌諱に触れ、爾来彫塑家に対する銅の配給は停止されてしまったのである。

彫塑家から銅を取上げたのでは致命傷で、制作どころか飯の食い上げである。そこで当然彫塑家協会ではあの手この手と、コネを求めて軍部に哀訴歎願に及んだが遂に功を奏することは出来なかった。

こんな或日、私は朝倉文夫先生の宅に遊びに行ったところ先生はこの話をして、何んとかならぬかと持ち掛けて来た。私にはいささか心当りがあったので、一応当って見ることを約束してその日は別れた。

そこで私は早速商工省の物価局長官を訪ねたのである。時の長官牧楢雄君は大分市上野丘の出身で、私とは子供の時からの親友であった。その牧君にこの話を持出したところ、相手が軍部だから難しいぞと云いながらも、非鉄金属課長の渡辺誠氏を呼んで親切に紹介やら依頼をしてくれた。

それからは私はこの課長と幾度か接衝しておる間に課長は大いに理解して乗気になってくれ、軍部によき橋渡しの役を買ってくれた爾来朝倉先生と私は軍部へと度々会った。

朝倉文夫作「頬（ほほ）」の除幕式＜別府駅前＞46年10月30日
（写真は大分合同新聞社提供）

1、今度の戦争で日本は勝つのか敗けるか、敗けるのなら何も云うことはありませんが、勝つのであれば彫塑家に銅の配給は止むべきではありません何ぜなら大砲が尊いように戦争中と雖も芸術は尊いのですから、これは育てて行かねばなりませぬ

2、エジプトやギリシヤを見て貰いたい。今は三流国となっておるが、これらの国が人類の発展に如何に大きく寄与したか。又如何に多くの芸術的文化遺産を今日残しておるか。現にこれらの国は遠い祖先の残したこれらの文化遺産で生活しておるのである。国破れて山河ありと云うが、この国の人にとっては国破れて芸術ありではないでしょうか。

3　まことに人生は短く芸術は長しです。ローマに、パリーに、ロンドンにその例を見るではありませんか。

とまあこんな調子で接衝したと云えば嘘になる。実のところ歎願懇願これ務めたのであった。始めの内は剣もほろろの軍部もだんだんと理解を深めて何回かの歎願の時、遂に大英断をもって、彫塑家に銅の配給をしてくれるようになった。再び彫塑家に春が巡って来たのである。

頑迷固陋と云われた戦争中の軍部でさへ、芸術の価値を高く認めたのであるから、泰平の今日、今更芸術の価値や必要性を説くのはいさましい。（原文のまま）

（県立美術博物館建設期成会長）

県立美術博物館建設

生きて活動する美術博物館に

宮崎　豊

大分県が最近の如く工業開発によって県の発展をこい願うなら、それと平行して文化施設の充実を計り、県民の精神的情操の豊かさをつちかうことを真剣に考えることが為政者としての責務だと思う。先般来から行なわれて来た美術博物館建設に対し県民多数の一燈の寄付から某々会社の多額の寄付に至るまで、相当額の熱意ある寄付金のよせられたることに対しても県はなぜ美術博物館の建設に踏み切らないのか、がふしぎでならないし強い憤りさえ感ずるのである。

前木下知事も現立木知事も九州各県がすでにこの建設を終わって最後になってしまったが、それだけ立派なものを造る所存だと、いい訳のようなことをいっているがせめてもその立派なものに期待をし、責任をとってもらいたいと思う。

この美術博物館に対しての私の構想としては、先づ建物は完全なる耐震耐火であること、温度湿度の調節が完全であり重要貴重なる作品の保存に万全を期すことができるよう建設されなければならない。これが完成した暁には民間にある貴重美術品なども、その保存方を願い出る程の建物でなくてはならないと思う。

駐車場のスペースがない場合は一階をそれにあて二層三層と上に延ばして行きへやは十分の広さを保つとして、先づ常設展示室、特別展示室、美術展示室、研究室、収蔵庫、休憩室、館長室、職員事務室、会議室、ロビー、ギャラリー、などを最小限確保しなければならない。常設展示室、特別展示室には重要文化財、貴重美術品、民族資料などを常時展示しておくのだがどうかするとこれで事たれりとする向があり勝で、それでは困ると思う。

私はかって鹿児島市立の美術館を城山々麓に参観したことがある。その時あまりに参観者の少なくりょうりょうとした淋しさに驚いたのだ。あれだけの優秀美術品を保有しながら一通り県民に知れ渡ると全く動かない死んだ美術館となってしまう。ここで強調したいことはあくまで美術博物館は生きて活動している生きものでなくてはならないということである。そのためには特別展示室や美術展示室を生かして使用することであり、特別展の開催の場でなくてはならないと思う。時宜に応じ、時に応じ最適と思われる特別展を開催したり啓蒙的な最前衛展を開いたり、あるいはまた外国から将来された優秀美術作品展を開催したり常に前向に動いている美術博物館でなくてはならないと思う。これはわが国の代表的な東京国立博物館も国立西洋美術館でもあれだけの保有貴重美術品がありながら常に心がけて特別展を行ない時宜に即した生きた活動を続けているのである。

この為には多額の運営費を経上する覚悟がなくてはならない県内の歴史、民族、美術の優秀文化財を常時陳列することと、現代美術の発表の場と時宜に適した特別展の開催と両々相まってここに本当の意味の美術博物館としての使命が達せられ、県民の美に対する精神的の豊かさはつちかわれ人間としての喜びを味うことができるのだと思う。

あわせてこの美術博物館の建物の周囲の環境も建物と相まって美術品におとらぬ美しさを保たなくてはならないことをつけ加えたいのである。

（県立美術博物館建設期成会副会長、県美協会長）

県立美術博物館建設期成会

土地問題がガン　早急

勝蔵、生野祥雲斉、辻英武、仲町謙吉（事務局長）、野尻哲、平田暘邨、米田貞一、渡辺澄夫、。監事に佐々木憲一、園田喜平、田川奨、。顧問若干名となっている。

事業としては、四十二年度から県立美術博物館の建設のための調査費三〇万円の実現、この調査費は、四十三四と続いた。県民の美術館建設に対するムードをもり上げるため「愛蔵美術品オークション」（展示即売）を、開催した。（四十四年、七年二十九日―八月二日、トキハ文化ホール）趣意書をつくり県下の有志の方々にご依頼申し上げたところ、反響は大きく、絶大なご協力をいただいてこの益金二百万円を基金として寄託した。更に街頭募金として全員が街頭に立って紫の羽根を売った。十円玉一つ一つであったが一般の方々のご協力は、九万六千四百八拾円にもなった。

上田会長はこれらの県民の心の支えをぜひ早くつくるようにすることである。

（県立美術博物館建設期成会事務局長・県美協事務局長）

ややさめかけたムードを更に盛り上げ県民のための

きの執行部に不安があり理解がうすいとすればこれを早く方向づけをしなければならない何と言っても空白の間

ばこれを早く方向づけをしなければならない

ある。県議会、とりまきの執行部に不安があり理解がうすいとすればこれを早く方向づけをしなければならない何と言っても空白の間ややさめかけたムードを更に盛り上げ県民のための心の支えをぜひ早くつくるようにすることである。

（県立美術博物館建設期成会事務局長・県美協事務局長）

れたが、今が一番重要な時である。立木知事になり、野尻前社会教育課長も県議になられたことでもあるし窓口は更に広がったわけである。然しこの空白は大変なことにもなった。昭電が約束した寄付金を破棄する申し出があり経済界の変動も激しく、今こそ早期建設を叫ばなければ益々困難なことも起らないとは言えない。

今後の課題は、土地問題がそのガンになっているとすれば早くこれを処理できるように働きかけると共に美術館の構想を具体的明確化する必要がある。次に本気で知事が建設するようにさせることである。県議会、とりまきの執行部に不安があり理解がうすいとすればこれを早く方向づけをしなければならない何と言っても空白の間ややさめかけたムードを更に盛り上げ県民のための心の支えをぜひ早くつくるようにすることである。

（県立美術博物館建設期成会事務局長・県美協事務局長）

について私はこう思う

県文化財の流出を防ぐ

渡辺澄夫

9月24日から3日間、大分県地方史研究会と大分探勝あるこう会との共催で、天草・長崎方面のキリシタン遺跡を訪ね見学する機会をえた。

天草本渡の殉教公園に弘治元年（1555）に豊後府内にきて育児院を創め、翌年府内病院を建てて日本ではじめての西洋医学の手術をしたアルメイダの白亜像の建っているのを見て驚いた。アルメイダはのち天草に来て死んだらしく、ここにかれの記念像のあるのは当然であるが、それにしてもはじめて育児院や病院を建てた大分に、かれの銅像一つないのはどうしたことかと恥ずかしかった。もっともアルメイダ病院が先年建てられたがとの標識板もなく、これがどの程度かれを記念するのかもはっきりしない。

こうした方面の後れを痛感していた矢先、長崎西坂の二十六聖人記念館に入ったら、ちようど入口のところに、大分市丹生の小原から出土したキリスト像とマリヤ像や十字架などに多数のメダル類が陳列され、別のところにはおそらくそれらが入れられていたらしい壺も飾られていた。キリスト像、マリア像ともに小さなものであるが、じつに精巧にできており、重要文化財に指定されていた。

その寄贈者の名前もはっきり記されていた。どうしてこんな大事なものが、長崎まで寄贈されたのか判らない。察するに、のち多数の隠れキリシタンが捕えられて長崎送りとなり、彼地で処刑され、牢死し、また江戸送りや日田送りとなって入牢させられたので、その冥福のためであろうか。

しかしそれにしても、大分県に美術博物館のようなものがあったなら、このような大切な文化財がむざむざと県外に流出するようなことはなかったろうと、つくづく感ぜられた。大分県が文化財の保存や史跡顕彰に立ち後れていることの実例をまざまざと見せつけられたような旅であったが、筆者らにはじつに収穫の多い旅であった。

（県立美術博物館建設期成会理事、県地方史研究会委員長）

建設用地の再検討を

首藤春草

美術館建設については県が容易に腰をあげようとしなかった木下知事はかって「造るなら急がず立派なものを」と言われたわれわれは急いで立派なものをと願っているので、知事の言は一種の逃げ口上ではあるまいか。その心底に造る意志があるのかどうかと疑ってもみた。そして数年、ことし当初県は二億の予算を計上したとの報道に一躍光明を得た感じで喜んだものである。建設予定地は芸術短大の移転とからませて国から用地の払い下げを受けるのだという。種々難問をかかえながらも、ともかく実現に向って県が動き出したことはありがたいと思っていたら、いつの間にか二億の予算は消えてしまった。この頃別府市議会で若手市議が芸術短大を別府に残し、美術博物館をこちらに誘致するために用地を提供する意志はないかと市長に質問した。私はかって予定地は上野だと聞いた時、折角巨費を投ずるのにもっと立地条件のよい所はないのかと思ったが、もし別府の自衛隊跡地十二万坪、みどりの九万坪もある松林の一角に美術博物館を、さらにその周辺に他の文化施設を配することも可能、都心にも近く大文化公園としての環境もよい。然も市には時価数億という貴重な美術作品多数を所蔵している。この芸術

に具体的構想を

仲町謙吉

昭和四十一年秋、大分文化会館の開館記念として開かれた松方コレクション展の収益金三百万円が美術館建設のためにと言うことで県に寄託された。四十二年の三月県議会で美術館建設基金条例が制定された。続いて基金に香典返しや、全快祝い、個展、グループ展など益金が寄託されて、県民の美術館建設に対する熱意は益々高まっていった。こんな県民の要望にこたえ、大分県立美術博物館の建設について関係当局に働きかけ、その早期実現を期するために、県芸術文化振興会議の主唱でこの期成会が生れた。この時が四十二年六月であった。

組織は、県下の文化関係団体、社会教育関係団体およびこの期成会の趣旨に賛同する県内外の学識経験者によって構成されている。役員は、。会長に上田保副会長に岩田正、草場勇、佐藤義詮、宮崎豊。理事に糸井英雄、大坪建三、辛島淘士、河野彰、利田正男、佐藤協力をもとにして大口募金に努力され新日鉄が大分進出に対し、美術館建設にと一億円、昭電、九石九電と大口基金が続々と約束された。一方県の方も四十四、五年と一千万づつ基金に積上げられ約一億八千万の基金ができたことになる。資金のことだけでなく、建設予定地についても早く決定するよう働きかけた。この県議会で経済学部払下げについて二億円が予算化され具体的な財務局との折衝に入っているが短大の構想の具現化とも関係して進展がおくれている。担当部局としての県社会教育課も四十六年度予算要求として大分県立美術博物館事業計画として鉄筋三階建五一三八平方米で総工費八億とし四十六年度に約二億四千万、七年度に約五億六千万と具体案を示して予算案要求をしたが結局土地問題に帰着してしまい総て出発点に立っているのが現状である。

知事選とからんで約一年ばかりの空白が生

県立美術博物館建設

作品も更に高度に活用する道もひらけようと考えた。そこで別府市美術協会の池田三比古委員長ほか数名の幹部と相談して市長に誘致の陳情を試みた。建設地については別府湾に臨む広域都市の一環として別府を考えてもよく、必ずしも大分に限ったことではあるまい。用地の決定は便宜的にそこに土地があるからというご都合主義ではいけない。建設後の利用度、観客動員も大切な要素で、美術関係者はどこにできても行く、しかし一般大衆は別で、足場の悪い所へわざわざ行く者は少い。県民大衆の情操を培い、その啓蒙、市広い文化の育成向上のためには建設用地の検討は十二分にやっていただきたい。

（県美協副会長）

知事や県議会の決断を待つ

浜田九一郎

美術館を建てようという話の起りはかなり古い。県美術協会（書・写との総合以前）で小品展や色紙展を開いて建設運動のための募金を僅かながら作ったこともある。また二年前頃には全県的にその署名運動も展開したが、呼びかけが弱かったのか周囲の状態が熟していなかったのか芽ぶいたままでいた。しかしいまは大いに違う。強力な期成会のスタッフがそろい、それにも増してバックアップする大勢がある。また庁内にも機構上の発展もなされたと聞く。すでに生みの陣痛は始まり、あとはただ知事や議会筋の決断を待つばかりと思う。それでもとみに襲った経済恐慌の波や、いつも後廻しになる文化行政とやらで、だれかは不安を覚えるかもしれないが、そうであってはならない。いろいろな開発問題とちがい、この建設には県のだれでもが反対はしまい。為政家の見識と勇気を信じて疑わない。

さて、美術博物館はできるが――いれもの即ち建物ができたからといって、直ぐにその機能が発揮できるものではない。文化会館はつぎつぎと催しものを招来してその役目を果しているようだが、これは左様にはいかない。中身即ち常陳できる精選された資料が絶対に必要で、しかもこと大分の特性を保つものを必要とする。この方面の調査と研究は相当の時間を要することは必然で早急に進めなければならない。先般南蛮美術展が大分市で開催されたが、出品されたものをみるとゆかりのある大分、長崎からのものがきわめて多く集められている事実からしても痛感させられる。

大分は文化史的にも特異な性格をもち、多くの美術家も出ている。その蒐集には非常な努力とまた多額の金を必要とするだろう。しかしこれなくしては立派な美術館はとてものぞめない。それにしても故首藤定氏が大連在住当時集められた多くの作品が故あってかソ連に運び出されたと聞く。なんとか返してもらえないものかと切にねがうものである。

（県美協常任委員）

悔いのないものを

岩男　順

本来、美術博物館という二元的構想には、私は反対したい。

美術館は、展覧会を中心とし、常時、陳列品の入れ替えをしなければならないし、かなり広い壁面と、鑑賞に必要な床面積を必要とする。

博物館は、郷土の文化財の展示と、保管を中心とし、それに保存、修理、調査、研究の施設が付随していなければならない

展示の対象となる文化財は、破損しやすいものが多いので、一度展示すれば、でき得る限り移動させないことが望ましい。

この両方の目的を同時に達するためには、非常に大きな建築物と施設が必要となる。

美術館については、大分市に文化会館が建設される時に、福岡文化会館の如く、展覧会場となるべき部屋の設計がなされておれば、何等問題が生じなかったはずである。

市当局のケチな根生と、美術文化に対する無理解さとが、今更の様に、情け無く思われる。

大分県の古美術品は、仏教彫刻が主となり、博物館によって保存しなければならない物は、木造彫刻と、石造美術品中、移動可能なものを対象とし、木造彫刻は、平安末期のものを主とするが、その数は多く、その大部分が痛んでおり、今、直ちに保管、修理をせねば、散逸、破壊の危機が迫まっている。

しかも、日本仏教文化史の上に占める豊前、豊後仏教文化の意義の重要性から考えても、これらの保存は、県民全体の責任といわなければならない。

この際、県文化向上のために、悔いの無い施設を持つ美術博物館建設をしてもらいたいものと、切に念願する。

（県美協常任委員・県文化財専門委員）

交通改善の配意と環境の整備を

大崎聰明

美術博物館を大分にぜひつくるべきだと、声をあげて既に久しい。

どうやらその幻影が現実のものとなってきそうな気色がしてきたことは喜ばしいことである。

聞くところによると、建設場所は旧大分大学の跡地を県立芸術短大と分け合うことらしいが、問題は市内からの交通であろう、狭い道路と平面交叉の鉄道踏切りが、わりあい近距離にありながら不便な場所という印象が強い。ぜひ交通改善の配意が必要である。それと同時に、美術博物館とその周辺が、県民に親しめるよう環境整備が大事であろう。

また設備関係も、利用者のために便利なよう設計に力を注い

について私はこう思う

でいただきたい。

ともあれ、芸術文化の殿堂が大分県の人々に深い理解と共感を与えるならば、キリシタン文化、古代文化で栄えた郷土に新しい文化の灯を点ずることになろう。

（県美協事務局次長）

「いまこそ」の時

藤原嘉久

さきごろ没した志賀直哉が「国民は重税に苦しみ、衣食住にこと欠いているとき、何の文化財保護ぞ」という痛烈な論評を1950年ごろしたそうです。当時、時期をえたことであったかも知れません。

時は流れて1970年代の現在、おおげさに言って物質文明の進展はいまに人間自身でおのれの住みかである地球を住めなくするような兆さえ感じられます。歴史をたどれば私たちの郷土はいくどか文化の花が咲き、壊されてきました。いま県下に散在する先人の遺跡、有形・無形の文化財と作品、そして記念品や資料はそれこそ気の遠くなるほどの時間と幾多の風雪にじっと耐え、かろうじて残ってきたものです。

昨今の経済の成長と安定は生活に余裕と文化的関心を高めました。しかし「自然の美」と「文化の美」は人間陶冶に不可欠にもかかわらず置き去られようとしています。自然と文化財保護の感覚は現代人間社会の通念としなければなりません。〝豊後南画〟に始る輝かしい大分県近代美術 100年の歩みからしていまだにこれを保存し、展示鑑賞ができる施設がないことは先賢の文化開拓の精神とはウラハラな現状ではないでしょうか。

地方の美術・博物館はその地方の文化をシンボライズするものであり、地域文化発展のよりどころです。これを持たない私たちの不利益は計りしれません。私たちの身近かなところに芸術的な催しが常にあり、貴重な作品の散逸を防ぎ、歴史ある文化の美が地域と密着して容易に鑑賞できる機能と構造をそなえた美術館の建設が望ましいかぎりです。

建設期成会主催のオークション、民間の寄付などにより、量的にはわずかの資金ながら住民サイドの気運は十分盛り上りを見せている折から、「こころのふるさと」の〝うつわ〟に行政当局者は思い切った投資を願いたいものです。たしかに他の先行する問題や事業は多いでしょう。しかし最初に述べた志賀直哉の言葉をかりるならば、「いまこそ」の時でありましょう。

（俳誌「層雲」所属・「くさの会」幹事）

外科・胃腸科

大塚外科医院

医院長　大塚正年

大分市新川電停前　TEL⑤1122

親しみやすく利用しやすい美術館に

渡辺恭英

一般の人にも、美関係者にも、気軽に利用できる美術館であってほしいが、特に後者の立場から言うと、第一に、グループ展や個展会場としてのスペースを確保してもらいたいし、さらにそれが、利用しやすいシステム（使用規定や使用料など）であること。第二に、常棟の作品は、いつでも、誰でも自由に研究できるように考えてほしい。

ボストン、ニューヨークなどの州立、国立の美術館でさえ、必ず個展用の会場が併設されているし、そのために、市民の利用度が高く、まさに、心のオアシスといった感があるが、作品などもさりげなく置かれ、実に親しみやしく、模写、撮影も自由なため、あちこちで勉強している姿が見受けられる。

せっかくつくられたものが、近寄りがたく、遠い存在になってしまわないように配慮してもらいたいと思う。入場料にしても、無料が望ましいが、せめて、自由意志にまかせた寄付制にするなど思い切った運営が考えられないものだろうか。

（県美協委員）

一日も早く具体案を

首藤詔子

大分県に在って、絵を描く上で最も、中央との格差を感じさせられることに大きな展覧会が全く見られないこと、県美展などにおける展覧会場が極端に悪いこと、絵画材料入手が困難なことなどがあげられます。県立美術博物館は、この様な点を充足できるものであって欲しいものです。十分な広さと高さを持ち、自然光を採り入れた落ち着きのある、便利な中央部に位置するもの、どんな展覧会も収容できるだけの豪華さと余裕を持つもの、更には、各種の研究会場や学習会場を内蔵し、芸術の殿堂となりうるもの、など、その建設には、大いに期待すべきものがあります。その為にも、一日も早く具体案が提出され、着工されるように望みます。

（県美協会員）

別府市立美術館

新展示場が完成

今後は山積する課題と取組む

佐藤村夫

先人が築き培ってきた大分の文化を基盤にしてこそ今日の、また明日の文化が創造される。われわれの郷土、大分県の歴史と文化を語る考古・歴史・民俗・美術・工芸・地学・生物・自然の移り変り…などの資料を収集し保存し公開して一般県民の教養を高めつつ、郷土文化の進展を図り、未来の大分県を創造することこそ緊急な課題である。そのセンターが県立美術博物館である。まだ九州では大分県だけが建設されていない。文化活動も決して沈滞してはいないのに、後進県大分の汚名はこんなところにもある。残念である。

市町村での文化施設の果たす役割も全く同様であるが、全県的に極めて貧弱である。幸に別府市では20年の歴史をもつ美術館はあったが、作品の保管所に過ぎなかった。

このたび文化館内に美術館の名にふさわしい展示場もでき、保管から公開の段階を迎えた。しかし市民の創作芸術活動を積極的に助長し、美術の推進力となり活動する美術館へと脱皮するには、課題があまりにも多い。その2・3について考えてみたい。

・移転を機に新しく6点の作品が追加された。新美術館の前途は明るい。しかし市民の好意による協力が主で購入費が少い。資料蒐集費の拡大こそ第一の課題である。

・現在は洋画・日本画が中心で、55点あるが、今後は渡画・版画などの絵画の他、彫塑・書跡・工芸と幅広く作品を蒐集したい。

・市立美術館であるので、郷土関係作家の比重は大きい。市民の協力を得て作品の蒐集と共に、その業蹟なども保存したい。

・常設展の他、企画展・貸館など多目的に活用すべきである。従来の市美展・ヌードデッサン研修会のほかに、まず別府市秀作美術展、グループ展、個展などが考えられる。企画展もあまり費用のかからないものから、順次実施すべきであろう。

・一般市民の文化施設への理解と協力がぜひ必要だそのため別府市美術協会を中心に関係団体の総力を結集する友の会を組織し、その情熱をもって今後の成長を図りたい。

・こう考えてくると課題は今後に山積している。美術館が独立し、運営委員会を組織し行動力のある専任館長による力強い運営が必要であろう。また旧美術館跡の郷土資料室を含めて、図書館と共に別府市の文化施設の中心的存在となるよう努力せねばなるまい。

（別府市立美術館長）

全九州美術連合展の発足試案について

来年度の九州地区文振会議（熊本県）で再検討

仲町謙吉

本年7月末に長崎県で九州地区文化振興会議が開かれた際、長崎県の提案により全員一致で決議された美術展試案。

その準備については長崎県で案を考えるが、各県から委員を出し連合委員会を組織化して案をさらにねる。また資金については過渡的措置として九州沖縄文化協会によることとし、将来は文化庁の補助を得る方向ですすめる。以上のようなことが決まった。

たまたま九州沖縄芸術祭の実行委員会が開かれた時、九沖の事業の中に『九州沖縄現代洋画展』が計画されていることと、先に長崎で決議されたことが一体となり、緊急各県関係者を集め、さらに具体的案の検討をすることになった。これが11月8日（大分県美展審査日）の長崎での会議招集となった。

この会議で提案されたものは、長崎県試案としてまことに粗雑なものであった。それは次のようなことである。

(1)名称＝九州絵画彫塑展。(2)出品方法＝㋑県展選抜展（前年度分）㋺代表作（各県に委嘱出品）(3)点数＝絵画 100点、彫塑30点程度、これは各県（福岡は別とし）10点、彫塑は3点程度となる。(4)会場＝年内2～3県を巡回する。(5)会期＝20日間程度とする。(6)入場料＝ 100円程度とする。以上

この席に九沖の方から伊藤研之氏が出席しており九州沖縄現代洋画展の構想について聞いた。その結語的発言はこの連合展の構想に同調してもよい。十分審議してほしい。とのことであった。しかし具体的に審議してはみたが、意見がまちまちであり、あまりにも問題がありすぎるので連合展については来年、九州地区文化振興会議の開かれる熊本県においてさらに検討することになった。

九沖で考えている『九州沖縄現代洋画展』は予定通り開催するので提案県長崎の事務局と打合わせ、連合展の趣旨にそえるように話し合いを重ねることになった。この両者の構想には全く別の意識があり、一体化するにはじっくり審議しなければならないだろう。

最後に言えることは九沖は小数の委員で事業をわがもののように決することなく、こうした連合組織体でもきまれば各県の意志を反映し、盛りあがる事業をやるべきであると思った。

（県美協事務局長・全九州美術連合展大分県代表委員）

消息

◦本年度大分県芸術祭賞等決まる。

昭和46年12月6日、大分文化会館で開かれた大分県芸術祭運営協議会の答申にもとづいて、次のとおり芸術祭賞等が決まり、12月13日の芸振会議の総会の席上表彰式が行なわれた。

◦芸術祭賞

大分県洋舞踊協会　（開幕行事）
大分県俳句連盟　（集中行事）
大分現代美術動向展　（参加行事）
第8回山香町総合文化展　（　〃　）

◦特別感謝状

柏谷　辰　雄（県民バレエ演出……東京在住）
桂　　直　久（県民オペラ演出……大阪在住）

県芸術祭受賞の「大分現代美術の動向展」会場風景・大分市府内会館。11月23日～28日、県画壇若手15人による意欲的な美術展として好評であった

◦感　謝　状

大分県高等学校文化連盟
大分県連合青年団
劇団造形劇場
〃　つみ木座
〃　しだか
演劇サークルあし
大分県歌人クラブ事務局
大分県三曲協会
大分勤労者音楽協議会
実琴会箏曲教室
新明音楽会九州支部
大分高等学校
竹田市文化連盟
蒼　土　会
大分市教育委員会
雲龍文化書芸院
大分県美術協会
大分アララギ会
「門」詩友会　緒方町
緒方町教育委員会
別府芸能文化協会
日出町文化財保護委員会
関心流日本興道吟詩会
演劇サークル　糸車
別府民踊百踊会
大分県職場音楽連盟
大分マンドリン協会
大分県音楽協会
大分県川柳大会事務局
大分大学グリークラブ
大分大学マンドリンクラブ
別府菊水会
大分県人形劇サークル協議会
大分勤労者演劇協議会
別府市美術協会
秀　流　会
七　重　会
柳　扇　会
玖珠町教育委員会
玖珠町芸術文化振興会
津久見市文化協会
豊後高田市文化協会
犬飼町民文化会議
国東町文化協会
武蔵町教育委員会
武蔵町文化協会
淡窓伝光霊流日本詩道会
丘星会日本詩吟学院

◦県展選抜展の出品が決まる。

昭和46年度第11回の県展選抜展は昭和47年2月4日～10日まで、東京都美術館で開催されるが、本県から次の4名が出品することに決まった。

種　別	題　名	作　　者	住　所	県における受賞
日本画	暗　樹	上野マリ子	日出町	知事賞
洋　画	変　身	貞松　和憲	大分市	文部大臣賞
彫　刻	19　才	平原　孝明	別府市	教育委員長賞
写　真	茸　床	河野　公記	大分市	県美協賞推薦1席

◦千本延隆氏叙勲（勲3等瑞宝章）を受く。

恒例の秋の生存者叙勲が11月3日、文化の日に発表された。大分県芸術文化振興会議副会長である千本延隆氏（大分県音楽協会長）は、この光栄に浴した。50年間、黙々と打ち込んできた音楽文化への協力が評価されたものと思われる。

◦後援・協賛行事も終わる。

(1)後援行事

行　名　事	期　　日	場　　所
九州沖縄グラフィックデザイン展	9月14～19日	トキハ文化ホール
九州交響楽団巡回公演	9月16日	日田市民会館
沖縄民俗歌舞公演	11月25日	津久見市民会館

なお、第3回九州沖縄芸術祭文学賞地区優秀作品については、10月31日審査のうえ九沖事務局（福岡）～送付した。

(2)協賛行事

行　事　名	期　　日	場　　所
昭和46年度青少年芸術劇場「文楽」	8月6日	大分文化会館
昭和年46度文化庁移動芸術祭巡回公演オペラ「フィガロの結婚」	11月26日	佐伯文化会館

◦第4回（47年度）九州沖縄芸術祭行事計画

10月20日の実行委員会で次のとおり決まった。

1　ああ白秋

白秋の詩や詩が作曲された歌唱を中心にしてスライドによる九州の風物、当時の記録写真を映し出し、日記や書簡の朗読による白秋の生涯を紹介する。

全体を歌で綴る生涯史

歌……九州出身の栗林義信　三宅春恵（ソプラノ）
伴奏……九州交響楽団の選抜　15人
朗読……芥川比呂志又は宇野重吉

2　沖縄民謡の夕べ（ライラック合唱団）

4部合唱団ならびにオーケストラ伴奏

舞台にコーラスとともに、その民謡を振りつけられた沖縄舞踊を配することはよって、さらに沖縄の心を強くアピールできる。

コーラスは現地で編成する。

3　九州現代洋画展

(1)　出品方法　　代表作展
(2)　作品の範囲　　洋画（油絵・水彩・版画）
(3)　出品点数　　100点（各県10点目標）
(4)　規　　格　　50～100号程度
(5)　会　　期　　1会場2週間程度
(6)　巡回展とする。

波紋

『芸術文化はゼイタク』という時代は過ぎた

帆足清一

七回目を迎えた県芸術祭もすでに終わり、個々の行事もそれぞれに評価されている。各団体バラバラに行なってきた行事を芸術祭の名のもとに統一し、団体相互の交流と発展を図り、地方文化の向上に寄与するというねらいで始められた芸術祭だが、果してその成果はあがっているだろうか。

これまでの芸術祭の大きな行事を拾ってみると、松方コレクション展や桐竹紋十郎の文楽、上杉謙信展などを中央から招いた。地元の力を結集したものとしては第一回芸術祭で芸短大、高校、職場などを糾合した記念音楽祭を開いたのをはじめ、県美術百年展、ベートーベン生誕二百年記念演奏会、県民オペラ「フロイガの結婚」「椿姫」など。そしてことしは県洋舞踊協会あげてのバレエ「白鳥の湖」、オペラ第三弾「カバレリヤ・ルスチカーナ」、高校、青年団なども含めた演劇祭、職場音楽連盟の演奏会、県美展など。ハデさはないが俳句、短歌などの文芸関係の大会も開かれた。

この間、参加行事も年々ふえ、内容も充実する一方当初は認められなかった個人や一社中の参加も制限をゆるめられ、県民総参加といった理想の姿に近づいてきている。もちろんこれを契機に各ジャンルがまとまり、団体相互の有機的なつながりも強まるなど、芸術文化の基盤強化に大きく役立っている。

だが「よりよいものを、より安く、より多くの人に」ということが文化の底辺を広げるのに必要だ。県芸術祭が、一応型が整い、軌道に乗ったとすれば、今後はこの点にも力点を置いてほしい。よく「大分にいれば音楽会にも行けるし、バレエも楽しめる」といった羨望のことばを、あちこちで聞く。これは何も音楽、バレエに限ったことでないこの渇望に応えるため、すでに県美展は小規模ながら巡回展をやっているし、県民オペラも昨年は何回か巡回公演をしている。

地方巡回をすることでこういった地域差をいくぶんでもなくせるし、またそれが改めて自分たちの文化の特質を見出すことにもつながると思う。せめて県南、県北、県中央ぐらいにでも分けて、芸術祭のメーン行事の幾つかを巡回させたら……と思う。多くの努力を払って完成させたものを、ただ一回の公演、展示で終わらせるのは何としても残念であるし、大きなロスでもある。

もちろん地方巡回には会場、経費、観客動員など、種々困難があることはわかる。だが受け入れ側の団体をバックアップして県や市町村が経費補助をするなど力を合わせれば、もっと事態は改善できる余地があるのではなかろうか。芸術文化は〝ゼイタク〟といった時代は過ぎている。

（大分合同新聞文化部次長）

4　安川加寿子の演奏会
5　九州沖縄文学賞（小説）公募

○第15回大分県勤労者創作美術展開催要綱

1. 趣　旨　勤労者の文化的素養と豊かな情操を培うことを目的とし、勤労生活の中から創作された作品を広く展示しようとするものである。
2. 名　称　第15回大分県勤労者創作美術展
3. 主　催　大分県・大分県労政協会
4. 後　援　大分県教育委員会・大分合同新聞社・NHK大分放送局・OBS大分放送・TOSテレビ大分
5. 協　賛　大分市・大分労働基準局・大分県美術協会・大分県文化団体連絡協議会・大分県宣伝美術会・大分県労働者福祉協議会・大分県経営者協会・大分県中小企業団体中央会・大分県商工会議所連合会・大分県商工会連合会
6. 会　場　大分市府内町２丁目　トキハ文化ホール
7. 期　間　昭和47年３月21日(火)から３月26日(日)まで
8. 種　目　絵画、彫刻、工芸、デザイン、写真、書道
9. 規　格　(絵画・彫刻・工芸)絵画については会場の都合により60号程度を最大限とし額縁又は表装すること（仮表装でも可、仮巻は不可）。
(デザイン)生産を中心としたデザイン・生活を中心としたデザインを含む　（以下略）

・連絡(照会)先　大分県労政課・大分・中津・臼杵・日田・佐伯労政事務所

編集後記

第９号は11月発行の予定であったが、原稿未着のため、のびのびになり12月になってしまった。その間県議会では県立美術博物館について質問や答弁がかわされ、知事の発言によって別府市には建設しないことが明確になった。

さらに12月22日付けの大分合同新聞によると南九州財務局に申請していた旧大分大学経済学部跡地を12月21日の国有財産南九州地方審議会で払い下げの承認がされた。したがって県では同跡地に県立芸術短大の移転拡充と県立美術博物館新設の方針が強力になり、９月補正で土地購入費２億円の計上にプラス47年度には年次計画として予算を組むことが考えられる段階まで発展した。

県の計画によると61,144㎡のうち芸術短大移転用地に56,000㎡、県立美術博物館用地に5,000㎡を予定している。

県立美術博物館は48年度までを調査設計期間に、50年完成を目ざして来年度予算には設計委託料として 1,900万円を要求している。

同館はいまのところ鉄筋３階建てで、延べ5,138㎡（建て面積2,000㎡）で美術展示場、博物展示場、郷土資料室などからなる予定。県計画の建設工事総額では約４億８千３百万円かかる見込みとなっている。

第９号はタイミングとしてこのように発表された後に発行されることはまことに残念であるが、せめてもこの号が今後の進展に何らかの形でプラスするよう資料として十分活用してほしいと思っている。

特に九州各県美術博物の一覧表は一目りょうぜんにその差を発見することができるので、最後に建設する大分県としては他県より劣ることのないよう気運を盛りあげてほしいものである。

次号は１月発行予定「県地方史・文化財」特集号としてすでに執筆依頼済みである。執筆者のご協力を切にお願いする次第です。